

◆『Intelligence』購読会員の皆さまへ：ニューズ・レターNo. 43(2017年1月号)◆

新年あけましておめでとうございます。昨年に続きトランプ大統領政権発足など、いろいろと世界的に変動の大きくなりそうな年ですが、皆さまにおかれましてはよき年となりますよう、祈念しております。さて、次号『Intelligence』第17号の編集が3月末刊行の予定で進められております。その次の18号の投稿原稿も募集しております。締め切りは、毎年9月末です。投稿をご予定の方は、事務局まであらかじめご連絡頂ければ幸いです。

ご愛読の会員の皆さまには、ニューズ・レターとともに「Intelligence」会員専用ウェブサイト <http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> また、会員向けブログとあわせてご覧いただければ幸いです。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

【**ブログ用エッセイ募集**】会員向けブログでのエッセイは、お楽しみ頂いていますでしょうか。第十回までのブログの題名と文章の一部がネットでご覧頂けるようになっていました。いろいろな方の研究上の興味深い逸話をご執筆いただいております。このブログのエッセイの執筆希望者を、購読会員の中から募っております。研究に関する小話やヒント、資料紹介などを会員向けブログに掲載なされたい方は、お原稿をお待ちしております。原稿の長さは千字程度、写真を二葉そえてご提出下さい。詳しいことは、事務局までご連絡下さい。

【**第108回研究会**】(12月23日(金)午後2時30分～5時30分)

・本間理絵(NHK出版)「戦時の「ラジオドラマ」のメッセージ性—小林勝作品を中心に」は、草創期のラジオドラマの台本作家・小林勝(1903-1982)が残した戦時のドラマ台本47作品のうち時局に関連した17本の台本から戦意高揚キーワードを抽出し、分析することにより、ラジオドラマが持っていた「ゆるやかなプロパガンダ」を論じて下さいました。

・鈴木貴宇(東邦大学理学部教養科)「占領期における欲望のかたち—雑誌「新商品と新商売」を事例として—」は、占領期に発行された『新商品と新商売』という、清水正巳が中心となって発行された雑誌から、地方や中小の商工業者あるいはアマチュアを対象として展開された、潜在的な欲求を利根的に開発する占領期の世相を反映した雑誌の内容を読み解いて下さいました。

なお、研究会当日に配布されたレジュメは、会員ホームページにアップされています。

<http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> をご覧下さい。

●今後の20世紀メディア研究会は、1月28日(土)、3月18日(土)、4月29日(土)、5月27日(土)に予定しております。研究会でのご報告御希望の方は、20世紀メディア研究所事務所 m20th@list.waseda.jp まで、メールにてご一報下さい。

【**インテリジェンスをめぐる最近の話題**】

米国や英国でインテリジェンス組織をめぐる話が最近ニュースになることが多くなったと感じるのは私だけだろうか。今日のニュースでは、ドナルド・トランプ氏が選ばれた大統領選挙でロシアの介入があったとし、トランプ氏とロシアとの関係を疑う話題で、CIAをはじめとする米国のインテリジェンス機関が非難され、さらにそれに関する不確実な情報を報道したかどでCNNなどのニュース組織が「フェイク・ニュース(でっちあげ)」だと批判されるに至っている。「偽ニュース」だと一方的に指弾し、“偏向メディア”だと決めつけるだけで、何ら説明しようとしないうトランプ氏の態度には改めて言論の危機を感じる。

一方、昨年末の12月にはケンブリッジ大学で行われていたケンブリッジ・インテリジェンス・セミナー(The Cambridge Intelligence Seminar)が、クレムリンの活動対象になっているとの懸念からインテリジェンスの専門家が三名辞めることになったというニュースが伝えられた。元MI6などのインテリジェンス関係者が集まるセミナーで、新たに発刊した雑誌の資金の背後にクレムリンがいたということらしい。男ばかりの会だから女のあなたが参加するとよい、などと言われて、その気になっていたところで驚いたのだが、疑いや囁きだけで、確たる証拠が出てきて追求されている訳では無いところが、「ぼんやりとした不

安」をめぐる噂話としか呼べないような状況である。インテリジェンスがそのような霧に包まれやすい性質なのは仕方がないが、それが SNS などの無責任なつぶやきによって全く逆に解釈されたりして拡散され、ジャーナリズムがそれに対応し切れていない印象がある。

フランシス・フクヤマはこのような現状を、“Post-fact(事実の後)”の世界と呼んでいるが、考えてみれば、幕末の日本も新しい新聞雑誌の登場とともに、読売瓦版が嘘か誠かわからない怪情報をばらまいて、何が真実か誰を信ずべきかわけのわからない状況になっていた。インターネットの普及は同様に言論における権力構造を変化させ、同時に国際社会における権力や国家のありようも変えようとしているが、その変動に思考と思想が追いついていない。特に諜報戦の最前線がサイバー空間になってしまっているインテリジェンス機関では、権力者に忠誠を誓う秘密の作業の部分と開かれた民主主義的な世論という理想との間に折り合いが、ますます付け難くなっているように思われる。最近のニュースは、政治的な潮流の変化により、インテリジェンス機関も方向性を模索しつつある状況を示しているようだ。

そのようなインテリジェンス機関の活動を監視するのは、ジャーナリズムの役目だが、下手な陰謀論に傾くことなく、単なるスキャンダル探しに終始することなく、いたずらに憶測に踊らされることなく、インテリジェンス機関の組織のあり方の変容を論じることができるかどうか。ジャーナリズムにとっては、自ら変容しつつある言論空間を編み直しながら、それを観測し論じなければならないという難しい局面にあるが、最も憂うべきは言論空間の分断である。一方では、慎重な事実の吟味による議論が開かれた知識人的な世界と、一方的で断片的な物言いが娯楽とともに大量に流通する大衆デマゴギーの世界がひろがり、前者が権力者に取り込まれ、後者の中に飲み込まれるという構図である。いつかどこかでもみた、そのような状態の出現の可能性に、私たちは決してシニカルに構えていてはならない。

[1月10日付 文責：土屋礼子]